

イエス・キリストの黙示 - 第十六

七つの雷鳴の解明：黙示録と秘史の預言的分析

Jeff Pippenger

2023-11-15

私たちは、ヨハネの黙示録十一章から十三章に描かれている七つの雷の隠された歴史によって特定される、預言的出来事の順序を示してきた。私たちはまだ、これらの出来事の展開の中で、プロテスタンティズムの角と共和主義の角の歴史を重ね合わせる段階に到達していない。また、「真夜中の叫び」のメッセージにおけるイスラムの役割を特定するための理解の基盤も、まだ整えていない。しかし、これらの出来事には非常に重要な真理が結び付いており、それは、封印が解かれつつある諸真理を理解したとき、人は何をすべきかを示している。黙示録の祝福には、そこに書かれている事柄を「守る」責任が含まれている。

封印が解かれつつある歴史の流れは、そこに書かれている事柄を聞き、読み、守る者たちに、神の創造の力を伝えている。したがって、死んで干からびた骨の谷を貫く情報スーパーハイウェイの街路でエリヤとモーセが死んでいた「三日半」の意義を明らかにするために、私たちはイザヤの最後の預言的叙述と黙示録十一章から十三章の考察からいったん離れる時である。今私たちが明らかにするのは、「荒野」の象徴性である。

前回の記事では、七つの雷の隠された歴史によって確立された一連の出来事の預言的証人を四つ特定しました。キリストの像の系列、二人の証人の系列、獣の像の系列、そして偽の北の王の系列です。

偽の北の王の系譜の後半は、538年に教皇権が権勢を得たことから始まる。その後、霊的な偽の北の王である教皇権は、千二百六十年のあいだ、霊的エルサレムと霊的イスラエルを踏みにじった。

また、彼らは剣の刃に倒れ、捕囚として万国に連れ去られる。エルサレムは、異邦人の時の満ちるまで、異邦人に踏みにじられる。ルカ 21:24

ジョンは聖所と群衆の両方を測るように命じられたが、中庭は除外するようにも命じられた。というのも、それは千二百六十年のあいだ異邦人に与えられていたからである。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除いて、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2.

ヨハネとルカは、異邦人が「エルサレム」を「四十二か月」のあいだ「踏みにじる」と証言している。ヨハネはその期間を示し、ルカはその歴史の終結点を示している。この二人の証人は、ダニエル書第八章十三節の問いに言及している。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると、別の聖なる者が、語っていたあの聖なる者に言った。「日ごとのささげ物に関する幻と、荒廃をもたらす背き

は、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることになるまで、いつまで続くのですか。」
ダニエル書 8:13.

聖所と「host」がどれほどの期間踏みにじられるのかという問いは、ダニエルが「聖所」および「host」として描くエルサレムを踏みにじる働きを遂行する二つの荒廃の勢力を示している。J. N. アンドリュースが述べたように、この節の正しい基礎的理解は、この節が聖所と「host」の双方を踏みにじた二つの荒廃の勢力を特定しているという点にある。この節で特定されている第一の荒廃の勢力は異教であり、第二は教皇制である。「host」という語は、ヨハネがエルサレムの神殿の「礼拝者」と呼ぶ人々を指すために、ダニエルが用いている表現である。

ダニエル書8章には『荒廃』が二つある。——この事実はジョサイア・リッチによってきわめて明確に示されているので、ここに彼の言葉を掲げる：

「“The daily sacrifice” は英語本文の現行の読みである。しかし、原文にはそのようないけにえというものは見当たらない。これは一般に認められている。それは訳者が施した注釈ないし解釈である。真の読みは “the daily and the transgression of desolation” であり、daily と transgression は “and” で結びつけられている。すなわち “the daily desolation” と “the transgression of desolation” である。これらは、聖所と軍勢を荒廃させる二つの力である。」 - 『Prophetic Expositions』 第1巻、127ページ

聖所と軍勢が、常なるものと荒廃の背きによって踏みにじられることは明白である。13節を注意深く読むと、この点は確定する。そしてこの事実は、さらに次のことを確立する。すなわち、この二つの荒廃は、サタンがエホバの礼拝とその大義を覆そうと企ててきた二つの大いなる形態である。これら二つの語の意味に関するミラー氏の所見と、その意味を確定するにあたって彼自身がとった手順は、次の見出しのもとに示されている。

二つの荒廃とは、異教と教皇制である。

「『私は読み進めたが、それ [the daily] が見つかったのはダニエル書以外にはなかった。そこで私は [コンコルダンスの助けによって] それに関連している語句を取り上げた。『take away;』 『he shall take away』 『the daily;』 『from the time the daily shall be taken away』 などである。私はなおも読み進め、この聖句については光が見いだせないのではないかと思った。ついに、私はテサロニケ人への第二の手紙2章7、8節に来た。『不法の秘密はすでに働いている。ただ今は、妨げる者が取り除かれる時まで、今妨げているだけである。そして、そのとき、あの不法な者が現れるであろう。』等。そしてその聖句に来たとき、ああ！ どれほど真理が明らかで栄光に満ちて見えたことか。あれだ！ あれこそが『the daily』だ！ さて、パウロが『今妨げている者』、すなわち妨げる者と言うのは何を意味しているのか。『罪の人』 および『不法な者』によっては、教皇制が意味されている。では、教皇制が現れるのを妨げているものは何か。そう、それは異教である。すると、『the daily』は異教を意味しなければならない。』 - Second Advent Manual, 66ページ。」
J. N. Andrews, The Sanctuary and the 2300 Days, 33, 34.

レビ記26章の「七たび」の成就として、異教が聖所と軍勢を1260年間踏みにじり、その後は教皇制がさらに1260年間、同じことをした。ルカとヨハネによれば、教皇制は1798年に致命的な傷を負うまで、1260年間エルサレムを踏みにじってきた。1798年から1260年を引くと538年になる。538年から1260年を引くと紀元前723年になり、そのとき当時の文字通りの「北の王」であったアッシリアが、イスラエルの北王国を奴隷として連れ去った。

ヨハネは、教皇権が聖所と軍勢を踏みにじった千二百六十年にのみ言及しているが、ルカは、異教と教皇権がエルサレムを踏みにじった二つの千二百六十年の期間の双方を扱っている。というのも、彼は「異邦人の時期が満ちるまで」と述べているからである。ルカは、エルサレムが踏みにじられることを単なる一つの「時期」以上のものと捉えており、それを「異邦人の時期」の成就と呼んでいる。

もちろん、1856年にはミラー派アドベンチズムはラオデキアの状態に陥り、七年後にはレビ記26章の「七つの時」の真理を退けたので、アドベンチズムがこれらの単純な聖書の事実を理解することは不可能である。私が指摘している事実とは、三つの道標、第一と第二の道標の間の期間、そして第二と第三の道標の間の第二の期間を示す七つの雷の隠された歴史が、偽りの北の王の預言の流れの中に表されているということである。

その流れは紀元前723年に始まった。アッシリアの王、すなわち文字通りの北の王によって、北イスラエル王国は奴隷にされた。続いて538年には、霊的な北の王に力が与えられ、彼はさらに千二百六十年間、霊的なエルサレムを踏みにじり、1798年に致命的な傷を受けた。紀元前723年から538年まで、イスラエルを隷属させていた勢力は、常に異教勢力であった。

キリストに関する預言の系列は、紀元27年の洗礼において真の北の王として油注ぎを受けたことを示しており、そののち、預言的な千二百六十日を経て、彼は十字架につけられた。続いて弟子たちは、真の北の王のメッセージを宣べ伝える力を与えられ、紀元34年のステパノの石打ちの刑に至るまで続いた。キリストがその奉仕の全千二百六十日のあいだ歩かなかったただ一度は、凱旋入城でエルサレムに乗って入ったときだけである。ゆえに、彼は千二百六十日のあいだエルサレムを踏みにじったし、十字架の後には弟子たちも同様にした。偽の北の王の系列と、真の北の王であるキリストの系列という両方の系列が、千二百六十日のあいだエルサレムと軍勢を踏みにじった。

異教は、血統的ユダヤ人の地上の聖所奉仕における礼拝制度を偽って模倣したものであり、教皇制は、霊的ユダヤ人の天の聖所奉仕における礼拝制度を偽って模倣したものである。異教の1260年はキリストの1260日に対応し、教皇制の1260年は弟子たちの1260日に対応した。

二本の線のそれぞれは、2023年7月に封印が公に解かれ始めた七つの雷の隠された歴史の、同一の預言的構造を含んでいる。その開封は、ミラー派運動の最初の失望を認識することによって一部達成された。彼らの最初の失望は、十人の乙女のたとえで「待機の時」と呼ばれる期間を招いた。「待機の時」は、ニューハンプシャー州エクセターのキャンプ集会で、真夜中の叫びのメッセージが完全に確立されたときに終わった。エクセターのキャンプ集会は第二の道標となり、それに続いて、裁きの第三の道標と最後の失望が到来するまで、真夜中の叫びのメッセージが宣べ伝えられる期間を招いた。

三つの道標は、最初の失望、真夜中の叫びのメッセージ、そして最後の失望であった。これらの三つの道標は、ヘブライ語の「真理」という語と対応しており、この語はヘブライ文字の最初、第十三、そして最後の文字で表される。最初と最後の両方が失望であることは、アルファとオメガの印を表している。

ミラー派の歴史には千二百六十日に関する直接的な記述はない。しかし、ミラー派の歴史は第一の運動の歴史であり、ゆえに最後の運動を予表している。最後の運動における第一の失望の歴史は2020年7月18日に始まり、それは黙示録11章に描かれている。黙示録11章では二人の証人が殺され、これは第一の運動によって予表されていた最後の運動における第一の失望を画する出来事となる。

黙示録11章において、失望は、彼らの死体が通りに横たわっていた千二百六十日の期間をもたらし、こうしてそのたとえにおける遅延の時期を示した。彼らが復活するとき、日曜法の裁きと同じ時刻に、彼らは旗印として高く掲げられる。二人の証人の歴史には、象徴的な千二百六十日の期間が含まれている。

七つの雷の隠された歴史における第三の天使の動きの詳細は、他の並行する線よりもはるかに具体的である。しかし、第三の天使の線、真の北の王の線、そして偽の北の王の線はすべて、起点があり、その後に中間点に至る期間が続き、さらに終点での審判に至る期間が続くという、同じ預言的特徴を備えている。

千二百六十日は、七つの雷の隠された歴史の主要な要素である。千二百六十日は、黙示録第十二章で「荒野」として象徴されている。

そして女は荒野へ逃げた。そこには神によって彼女のために備えられていた場所があり、彼女がそこで千二百六十日の間養われるためであった。ヨハネの黙示録 12:6

教会は、千二百六十年にわたる教皇権による踏みにじりから逃れるため、荒野に逃れた。十四節はもう一つの証言を示している。

また、その女には大いなる鷲の二つの翼が与えられた。彼女が荒野にある自分の場所へ飛んで行き、そこで蛇の顔を避けて、一時と二時と半時のあいだ養われるためである。黙示録 12:14.

教会は竜と教皇権による迫害から千二百六十年のあいだ逃れていた。したがって、「荒野」は千二百六十日を象徴している。その数はダニエル書と黙示録において直接には七回現れるが、聖書の中ではほかにもいくつかの形で示されている。いずれの場合も、それはレビ記二十六章の「七たび」を表している。

それが、紀元前723年から西暦538年までの間に異教が聖所と軍勢を踏みにじったことであれ、教皇権が霊的エルサレムとその中の礼拝者たちを踏みにじったことであれ、それは、レビ記25章と26章に示されている「地の安息」の契約を神の民が破ったことによってもたらされた、神の民の離散の一つの例証であった。26章ではそれは「神の契約の争い」と呼ばれている。

わたしはあなたがたの上に剣をもたらし、それはわたしの契約をめぐる争いに報復するであろう。あなたがたが自分の町々のうちに集められるとき、わたしはあなたがた

の間に疫病を遣わし、あなたがたは敵の手に渡されるであろう。レビ記 26:25.

神の契約への反逆は、神の民に奴隷状態と離散をもたらしたが、それは「わたしの契約の争い」として表されている。ダニエルがモーセの「のろい」および「誓い」と呼び、また「わたしの契約の争い」とも呼ばれるその罰を理解しないなら、ダニエル書九章に表されているキリストの働きのより深い意味を見ることができなくなる。エレン・ホワイトの著作における一貫した評価によれば、ラオデキアの盲目の中にある神の民は、「原因から結果へと論じる」ことができない。あなたは暗黒時代の一千二百六十年を理解していると自認するかもしれないが、その踏みにじりの「原因」を知らないなら、あなたは盲目である。

彼は一週のあいだ多くの者と契約を堅く定め、週の半ばにいけにえと供え物をやめさせ、忌むべきものの蔓延のゆえにそれを荒廃させる。終局に至るまでそうであり、定められたものが荒廃の上に注ぎかけられる。ダニエル書 9:27

キリストによる契約の確証は、「ご自身の契約をめぐる争い」と直接結びついている。「呪い」の期間は二千五百二十年であり、まさに同じ契約をキリストが確証した期間は二千五百二十日であった。七つの雷の隠された歴史の構造を与えるヘブライ語の「真理」という語に一致して、キリストがご自身の契約を確証することになっていた予言的な一週には、ヘブライ文字の第一、十三、そして最後の文字で表される三つの道しるべが備わっていた。

その週の最初の道標は主のバプテスマ、第二の道標は十字架、最後はステパノの死であった。天使たちがウィリアム・ミラーを導いて「七つの時」を見させたように、レビ記26章の「七つの時」を見ることを拒むことは、キリストがご自身の血を流し、キリストの文字どおりの古代の民が退けたまさにその契約を確証された、その預言を完全に見ることを不可能にする。最終的に救われるすべての人の「真理」理解は、部分的で不完全なものにすぎない。しかし、「真理」を見ることを故意に拒む者は誰ひとり救われない。父なる神へ至る道はただ一つであり、それはイエスを通してである。そしてイエスこそが「真理」である。

これは考慮に値する理解である。というのも、それはレビ記二十五章と二十六章の契約に関わっているからである。「七たび」の「呪い」は、土地に安息を与えるための指針やヨベルの規定を実行することを彼らが拒んだことによって、古代の文字どおりのイスラエルの上にもたらされた。これは不作為の罪であった。その呪いが彼らに及んだのは、「殺してはならない」「盗んではならない」といった戒めを直接破ったからではなく、むしろ彼らが行うよう命じられていたわざを省いたからであった。彼らは、土地に安息を与えることに関する指針をただ無視したのである。どんな聖化されていない理由からであれ、単に真理を本当に調べる時間を取ったことがないがゆえに、（天使たちがウィリアム・ミラーを導いて発見させた）「七たび」を受け入れないアドベンチストたちは、古代の文字どおりのイスラエルが無視したのとまったく同じ契約に関する情報を無視することによって、同じ種類の不作為の反逆を行っている。初めは終わりを示す。

『荒野』として描かれている黙示録12章の1260日は、『七つの時』の象徴である。キリストの宣教活動の1260日と、弟子たちの宣教活動の1260日は、いずれも契約が確認されて

いた一週間全体を表している。異教が神の民を踏みにじった1260年と、教皇制が神の民を踏みにじった1260年も、いずれもモーセの呪いにおける『七つの時』全体を表している。

ヨハネの黙示録11章では、千二百六十日の後に、死んだ骨は十四万四千として契約に入るために生き返らされる。しかし、その契約関係を成就するためには、彼らは契約の条項を履行しなければならない。ダニエル書9章でダニエルがしたように、「七つの時」の契約の条項には、敵の地にいる者たちのための具体的な指示が含まれている。自分たちが散らされている現実を目覚め、主のもとに帰ることを望むとき、レビ記26章がどのように帰るべきかの指示を与えている。

あなたがたのうちに残された者は、あなたがたの敵の地で自分の不義のゆえにやせ衰え、またその父祖の不義のゆえにも、共にやせ衰えるであろう。もし彼らが、自分の不義と父祖の不義、すなわち彼らがわたしに対して犯した背き、またわたしに逆らって歩んだことを告白し、そして、わたしもまた彼らに逆らって歩み、彼らをその敵の地に連れ入れたことを認め、そのとき、彼らの無割礼の心がへりくだり、自分の不義の刑罰を受け入れるなら、そのとき、わたしはヤコブとの契約を思い起こし、イサクとの契約をも、さらにアブラハムとの契約をも思い起こし、またその地を思い起こすであろう。レビ記 26:39-42。

聖書における「pine

away」という表現は、溶け崩れ、腐敗し、食い尽くされてしまうことを意味する。

「pine away」とは、死んで干からびた骨へと成り果てることだ。そしてその教えは死を指し示している。なぜなら、それは、自分たちが「あなたがたの敵の地」にいるという自らの状態に目覚めた者たちを表しているからである。

最後に滅ぼされる敵は死である。コリント人への第一の手紙 15章26節

2020年7月18日、第三天使の運動における最初の失望が起こった。それは、聖なる預言的改革の流れにおける他のすべての最初の失望によって型示されてきたものである。エゼキエル書37章は、終わりの日における神の民が、溶け、腐敗し、食い尽くされて、ただ死んだ干からびた骨の谷と化していると示している。彼らは敵の地、すなわち死の地にいる。黙示録11章では、二人の証人が殺され、通りに放置された。すべての預言者は互いに一致している。ゆえにモーセは、エゼキエルの谷を貫く通りで死んでいる者たちに語りかけている。彼らは失望の状態にあって、エレミヤを通して教えを与えられる。

それゆえ、主はこう言われる。「もしあなたが立ち帰るなら、わたしはあなたを再び連れ戻し、あなたはわたしの前に立つであろう。もしあなたが卑しいものから尊いものをより分けるなら、あなたはわたしの口のようにになる。彼らはあなたのもとに立ち帰るがよい。しかし、あなたは彼らのもとへは戻ってはならない。」エレミヤ書15章19節

エレミヤは、もし神のために語ることを望むなら、立ち返らなければならず、その際には尊いものと卑しいものをより分けなければならないと知らされる。その箇所文脈から、卑しい者たちは彼が戻ってはならない者たちであることがわかる。この箇所で失望のうちにある彼の姿が描かれるとき、彼は自分がひとりであったことを認めている。

私はあざける者たちの集いに座らず、喜びもしなかった。あなたの御手のゆえに、私はひとりで座っていた。あなたが私を憤りで満たされたからだ。エレミヤ書 15:17。

エレミヤは「あざける者の会衆」に座してはいなかった。彼はひとりで座していたからである。彼は、あざける者の会衆である卑しい者たちのもとへ戻ってはならなかった。1863年、アドベンチズムは、モーセの「七たび」を退けるためにバビロンの娘たちの聖書的方法論へと立ち戻ったとき、「あざける者の会衆」への帰還を始めた。しかしエレミヤが語っているのは、ミラー派の歴史というよりも、むしろ終わりの日についてである。死せる骨の谷にいる者たちが、自分たちが敵の地にいることに目覚めるとき、彼らは、通りでの自分たちの死を喜んだ者たちのもとへ決して戻ってはならない。その者たちはエレミヤのもとに戻ることはできるが、彼は彼らのもとへ戻ることはできない。

しかし、もし彼らが戻るのであれば、「七つの時」と直接関係するモーセによって与えられた指示も果たさなければならぬ。黙示録11章で通りで死んでいる者たちは、三日半の間死んだままであり、これは預言的には「荒野」を意味する。

だからこそ、死者の最初の目覚めは、骨が一つに組み合わされるようにするメッセージによってもたらされるが、彼らにはまだ命がない。彼らを強大な軍勢へと変えるには、四方の風のメッセージ、すなわち封印のメッセージが必要である。彼らを一つに集める最初のメッセージは「声」から来る。

慰めよ、慰めよ、わが民を——あなたがたの神はこう言われる。エルサレムの心に語りかけ、彼女に告げよ。戦いの時は終わり、咎は赦されたと。彼女はそのすべての罪のために、主の御手から二重の報いを受けたからである。荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主のために道を備えよ。荒地に、わたしたちの神のための大路をまっすぐに通せ。」すべての谷は高められ、すべての山と丘は低くされ、曲がったものはまっすぐに、険しい所は平らにされる。イザヤ書 40:1-4。

その声は荒野から聞こえるが、その荒野は「七つの時」における散らしを象徴している。その声は荒野にある。というのも、エゼキエルもまた死者の骨の谷へ連れて行かれたからである。彼は遠くからではなく、まさにその谷のただ中で証しをしていた。

主の手が私の上であり、主の霊によって私は連れ出され、骨で満ちている谷のただ中に下ろされた。エゼキエル書 37:1

谷は三日半の荒野である。その声の約束は、エルサレムの不義が赦され、その戦いが終わったということである。その約束は、終わりの日に成し遂げられる十四万四千人の封印を表している。しかし、彼女の不義の赦しは、彼女がそのすべての罪に対して「二倍」を受けると結びついている。モーセが示した解決策は、彼ら自身の不義だけでなく、その父祖の不義も告白することを求めている。もし彼らはその命令を履行するなら、彼らの不義は赦される。

これらの真実については、次回の記事で引き続き取り上げます。

まことに、イスラエルのすべてはあなたの律法に背き、離れ去って、あなたの御声に従いませんでした。そのゆえに、神のしもべモーセの律法に記されている呪いと誓いが私たちの上に注がれました。私たちがあなたに対して罪を犯したからです。あなたは

、私たちに、また私たちを裁いた裁き司に対して語られた御言葉を、私たちの上にもたらした大いなるわざわいによって確かなものとされました。天の下のどこにも、エルサレムになされたほどのことは、かつてなされたことはありません。モーセの律法に書かれているとおり、このすべてのわざわいが私たちに臨みました。それでも私たちは、私たちの不義から立ち返ってあなたの真理を悟るために、私たちの神、主のみ前に祈りをささげませんでした。ダニエル書 9:11-13